

# 信州読書会 YouTubeLive&ツイキャス読書会

## 課題図書 トルストイ 『戦争と平和 第四部第一篇、第二篇』

信州読書会では、毎週、YouTubeLive とツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skyPebookclub>

YouTubeLive <https://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEY197oBQigdcgw>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?Page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?Page_id=714)

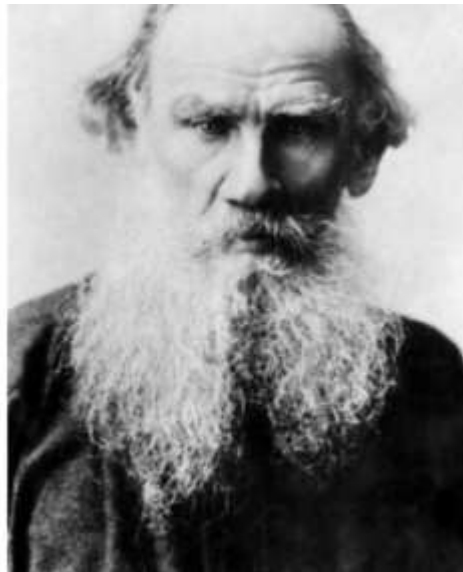
今後のツイキャス読書会の予定です。 <https://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/Playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)

## トルストイ 『戦争と平和』



第 349 回の YouTube 読書会の課題図書は、トルストイ 『戦争と平和 第四部第一篇、第二篇』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

作品の解説音声を公開しています。 [トルストイ『戦争と平和』解説](#)

## 「アンドレイの最期についての感想」

私がトルストイ『戦争と平和』を読むきっかけとなったのは、同名のハリウッド映画のテレビ放映であった。

この映画でアンドレイの最期のシーン、彼は瀕死の状態でナターシャとマリヤとの再開を果たした後、最後に目を覚まし、側にいる二人に微笑みながら言った。

「いい夢を見た 扉があってその向こうを見渡せた 僕は死者で 死ぬと目覚めた そうだ 死とは目覚めた 分かるだろ 簡単なことだ」

こう言って彼は安らかに息を引き取った。

何がいい夢だったか、さっぱり分からなかったが、考える必要はなく、映像を見て何となく「いいシーンだ」と思った矢先、直ちにカットが切り替わり、いきなりナポレオンが怒鳴り散らして余韻は消え去った。

ところがトルストイの小説は、こんな単純な描き方で済ませてくれるものではなかった。

(引用はじめ、以下、引用元は光文社古典新訳文庫電子書籍版。岩波文庫では第5巻406頁)

「愛とは生なのだ。(中略)すべては愛によってつながれている。愛とは神であり、死ぬとはすなわち、俺という愛の一粒が、全体の、永遠の根源に回帰することなのだ」

こうした考察は彼には心安らぐものと思えた。だがこれは単なる考察にすぎなかった。そこには何かが足りず、個人的なもの、思弁的なものに偏っていて、明解さが欠けていた。だからまたもや不安なもの、曖昧なものが残った。彼は眠りに落ちた。(中略)二枚のドアがともに音もなく開いた。あれが入って来た、そしてあれとは死だった。こうしてアンドレイ公爵は死んだ。

ところが死んだとたんに、アンドレイ公爵は自分が眠っていることを思い出し、死んだまさにその瞬間に、力を振りしぼって、目をさました。

『そうだ、あれは死だった。俺は死んだ——そして俺は目覚めた。そうだ、死とは覚醒なのだ！』

(引用おわり)

アンドレイの死に際の心理について、その克明な描写に私は圧倒され、イメージが追いつかず、正直なところ感動し損ねてしまった。

注釈を見てみると、アンドレイの最期の死生観は、ヘルダーとショーペンハウアーにルーツがあることが分かった。ショーペンハウアーについては宮澤さんの解説が理解の助けとなった。ヘルダーについては、第2巻でピエールと一緒にボグチャロヴォからルイスイエ・ゴールイへ向かう道中の渡し舟での会話にあった。

(以下、台詞部分かいつまんで引用はじめ、岩波文庫では第2巻493頁以下)

ピエール「この宇宙の何一つとして消えるものはないように、僕が消え去ることはありえない、いやそればかりか、自分がこれからも常に存在し、これまでも常に存在してきたのだと。」

「なるほど、それはヘルダーの学説だね」アンドレイ公爵は言った。

私はこのやり取りをさっぱり忘れ去っていたのだが、アンドレイは、とつくに知識として知っていたのだ。

だがこのとき彼は反論した。「だがね、君、そんなものでは僕を納得させるわけにはいかないよ。生と死——これこそ僕を納得させるものだ。自分と結びついた大切な存在を目の前にしながら、その相手に罪を感じ、償いたいと願っていた矢先に(中略)突然その相手が苦しみ、悶えたあげく、いなくなってしまう……なぜだ？ 答えがないはずはないだろう！だから僕は答えがあると信じている……。それこそが僕を納得させるものだし、これまでも僕を納得させてきたんだよ(中略)誰かと手を取りあって生きているうちに、不意にその相手があちら側のどことも分からぬ場所に消えてしまい、自分はその深淵の縁にたたずんであちら側を覗き込んだという事実だよ……。僕も覗き込んだんだ……」

このアンドレイの反論は、リーザと死に別れた体験を言っているのだが、自分の最期のナターシャとの関係を予言するものとなる。

ピエールは続けた。「あなたはそのあちら側が存在することも、そこに何者かがいることもご存じなんではないでしょうか？ そのあちら側が来世ですよ。何者かとは神のことです」(中略)「生き、愛し、信じなくてはなりません(中略)過去から未来まで永遠に、あそこの、あの全体の中で(彼は空を指さした)生き続けるのだということを」  
渡し舟の上でアンドレイは、青みを帯びた水面に夕日で赤く照り映える、ピエールカラーの川波に揺り動かされ、とうとう意見を変えた。

「うん、そうであってくれたらなあ！」  
(台詞引用おわり)

だが、アンドレイはこの後の5年余も、様々な試練を受け、死生観は揺れ動いていた。  
ナターシャと出会いアナトール事件の傷心を経て再び軍務に就き、ポロジノの決戦前は

(引用はじめ、岩波文庫では第4巻429頁)  
『死ぬのだ、俺は明日殺されて、この世から消える……これらすべては残り、俺一人がいなくなるのだ』  
(引用おわり)

と言うまで考えが後退していたが、ポロジノ戦で瀕死の重傷を負い、横でアナトールも同じような目に遭っているのを見た後、先述の死生観に立ち戻った。

ナターシャとの再会后、アンドレイは彼女に言った。

(引用はじめ、岩波文庫では第5巻404頁)  
「僕は生きるだろうか？ どう思う？」「絶対よ、そう信じていますわ！」(中略)  
「そうならいいだろうな！」  
(引用おわり)

渡し舟でピエールに最後に言った台詞がここで再現された。(岩波文庫の藤沼訳は少し違う台詞になっている。)

ほかにも色々あったのだが、このようにアンドレイの揺れ動きを、いくつかの伏線とともに通して振り返ると、不思議と腑に落ちてきた。

最期の境地に至るまでのアンドレイについて初読で味わえなかった感慨が、後からじわじわ湧いてくるのを感じることができた。

それは架空の人物のほずであるアンドレイが、読書体験の作用で、私の内面の一部に生まれ変わりゆく感覚が芽生え、それが物語の世界観の暫定的モデルとなり、イメージしやすくなったのかもしれない。

これからこの物語でアンドレイが、現世を生き続けるピエールとナターシャにどう関わるのか、読み進めてみたくなった。

今分かりかけてきた世界観も、読み進めていくと揺れ動くのだろう。それも楽しみだ。

私は生まれて初めて、自分の意思で読書感想文を書いてみようと思った。この作品に、信州読書会に出会えてよかった。

(おわり)

## 『戦争と平和』五巻 第四部 第一篇 第二篇 トルストイ 感想文

(引用はじめ)

「あの恐ろしい殺人を見たときから、ピエールの心のなかで、すべてを支え、命あるもののように見せていたバネが、まるで急に引き抜かれすべてがくずれ落ちて、無意味なゴミの山になってしまったようだった」(岩波文庫 五巻 P.365)

(引用おわり)

自分の命すらどうにもならず、その行方を握っているのはフランス軍、そんな彼らすら望んでいなかった恐ろしい捕虜の処刑が目の前で行われたのだ。

捕虜となったピエールが、この緊張の一刹那に体験し、目撃した現実は、彼のあらゆる信仰を消し去ってしまうほどの強いものだった。

以前に経験した懷疑は自分の罪が源泉になっていて、その絶望の救いは自分自身の中にあるのだと感じていた。

今、その世界が自分の目の前で崩れてしまうと、その原因は自分の罪ではないと、「もはや生への信仰へ戻ることは、自分の力の及ぶところではない」(P.366)という、ピエールの心の変遷が印象的だった。

残酷な現実には塞がれた時、神の配慮に従うしかないという気づきも、段階的な悟りも与えられる。

その気づきもピエールであればこそ理解できるのだと思われてならなかった。

ピエールは、捕虜が詰め込まれた掘立て小屋を抜け出そうとすれば、そう出来たにちがいないが、彼は元の小屋に戻った。

そこで、自分の年齢も知らない、プラトン・カラターエフに出会う。

まさに「イワンのばか」のイワンのような人、自己肯定感という言葉も相応しくない、愛とかという言葉は彼には空々しいくらい自然に、人、物を大切に好きになるプラトン。

お祈りもいい加減なのだが、神は許すであろうと思われる人。

「我慢は一時(いつとき)生きるは一生」、「裁きのあるところに嘘もある」、「命は運にねらわれとる」、根拠のないようなロシア風の金言を吐く。しかしそれは「ありのままですぐ急所をついている」。

まさに彼にとっての呼吸のようなものだと思われた。

日常を深く吸って吐いているような人なのだなど、こんな人が近くにいたら、そのすばらしさに気づく人間でありたいなと感じた。

「自己犠牲」、ソーニャがニコライに与えた自己犠牲は、プラトンが家族の代わりに罪を負った自己犠牲と全く違うものであると感じた。

「心の広い行為をしているという意識」(P.344)でニコライとの結婚を諦めるという企てのようなソーニャの自己犠牲は、気の毒ではあるが本物ではない。

理想は、無意識に示せるプラトンの自己犠牲、それこそが本物であると思う。

「ただ無意識の行為のみが実のりをもたらす」(P.305)

(引用はじめ)

「以前崩れ去ってしまった世界が今、新しい美しさをもって、何か新しい、揺るぎない基礎の上に、彼の心のなかでそびえたっているのを感じていた」(P.375)

「不可解で、丸っこくて、永遠不変の素朴さと真理の化身」(P.379)

(引用おわり)

ピエールに揺るぎない基礎を与えたのは、隣りで規則正しいいびきをかいている、この無垢なプラトン、まさに真理の化身という表現が相応しい。

「彼のことばと行為は、花から出る香りのように、なめらかに、必然的に無意識にあふれ出していた」(P.380)

ロシアに、ずっと昔にいたかもしれない魂の人なのだと、戦争とは無縁の空間をこしらえていた。

一方、重傷のアンドレイの側にはナターシャと妹マリアがついていた。

マリアは、憎んでいたナターシャが、自分の悲しみを本当に分かち合う人であることを悟った。

死に至るまでの切なく苦しいアンドレイとナターシャが、せめて幸せでいられた時間は、想像していたよりほんの束の間だった。

既にアンドレイは、死の兆候である「心の和み」の状態だった。

生きているものが理解できない世界にアンドレイは吸い込まれていたようで、言葉が冷たく既に遠いところへいるように現実感がなくなっていた。

この現象は、死への段階をしっかりと認識できるアンドレイのような鋭敏な人間に現れるものなのか。

このような段階を踏むことは、撃たれたり、また処刑で亡くなるよりはずっと幸福な形であるように感じられた。

《実はほんとうに単純なことなのに》と、死にゆく自分と周りの人間の差異をしっかりと理解していることが怖いほどだった。

多分、ほとんど人が気づかないのではないかと考えるが、真実は、自分が死に至るまでわからない。

アンドレイのその研ぎ澄まされた死への感覚は、「存在の奇妙な軽さ」という不思議な感じで理解された。与えられた死への段階が本当にあれば、その認識する時間はとても重要だ。

この章もまた、多くの人から生きる苦しみを感じた。

戦争の偶然の産物が、思わぬ結果を生むという計り知れないその実態を読んだ。

ナポレオンは負けたのだ。

「わしらの幸せは引網のなかの水のようなもんじゃ」(P.373)

プラトンの言葉が身に沁みた。

(おわり)

## 愛の関係性

戦争が深まりをみせる中、ボルコンスキイ家・ロストフ家・ベズウーホフ家にフォーカスが向けられてきた感がある。前章同様に「愛の物語」といえるだろう。ただアンドレイ公爵の容態は悪化。看病を続けるナターシャ。そこへアンドレイ公爵の妹マリアがかけつける。

ここのシーンはいろいろな趣がある。

まずはナターシャとマリアの関係性。アンドレイ公爵との婚約後、初めてナターシャがボルコンスキイ家を訪れた際には、お互いに気持ちが合わず、ぎくしゃくした感じがあった。もっともその時は他人の関係。

ただ婚約話が先に進めば、嫁と小姑問題が勃発しそうな様子ではあったが。

しかし、アンドレイ公爵の死を間近に、もはや二人の間には以前のようなわだかまりはない。関係は大きく変化した。

「そのナターシャの顔をまだよく見定めぬうちに、公爵令嬢は、これは悲しみを分つ自分の心からの友で、だから自分の親友なのだ、とさとった」(新潮文庫 P.102)

しかもマリアとニコライのこれからの展開を考えると、「親友」というよりむしろ「姉妹」に近いものがある。

それも親近感という、より深い関係性のもとに。

(引用はじめ)

「マリイはリヤザンを経由していらしたのよ」とナターシャは言った。(中略)ところがナターシャは、彼の前で彼女をこのように呼んで、自分でもはじめてそれに気づいたのだった。(P.109)

(引用おわり)

またトルストイ独特の表現なのか、ナターシャがマリアにアンドレイ公爵の容態を伝える際、「(二日前におこった)それ」という言葉を使っている。前の章でもこうした代名詞はあった。ここでいう『それ』を文脈からみると、「身体を衰弱させる熱病が悪い方向に向かいはじめた」(P.121)ということであり、いいかえれば「死の予感・覚悟」を意味しているということなのだろう。口に出しにくいことをあえてストレートにあらわさない。そこにナターシャとしての心の揺れ・葛藤が、より強く、深く感じられる。

もうすぐこの作品も終わる。初めは難しかったが、読み進めるにしたがって「トルストイ・ワールド」にはまっていく自分に気がつく。

次章も、愛をキーワードに登場人物の関係性が深まっていくのだろう。楽しみである。

(おわり)

おおい元気ぼっくすさんのご著書が発売中です！

[『人生 100 年を楽しむために ワクワクリベンジ読書のすすめ』](#)

## 『戦争と平和』 第4部第1編、第2編 読書感想文

殺しても死なない凶太そうなエレンが、ピエールから返事がこないことを気に病んで急死してしまうのは何か変というか納得がいきませんでした。

ソーニヤも嫌な女になってしまったし、脇を固めていた女性たちに起きた変貌ぶりがショックでした。

知事夫人によってニコライとの縁談が進められていることを知った時、

(引用はじめ)

その時マリヤは、うれしいというよりむしろ病的な感情を味わった。彼女の内的調和は失われて、またしても欲望と、疑惑と、叱責と、希望が頭をもたげたのである。

(引用おわり)

他の場面でもありましたが、マリヤが自分の人生に希望を感じる時にはいつも疑惑とか叱責といった負の感情がセットなのが気の毒で悲しいです。もっと自分の幸せをストレートに考えられるようになれば楽なのだと思いますが、それがマリヤなのだとも思いました。

ニコライが知事夫人に心の内を打ち明けてしまうというのは、なんかわかる気がしました。悩みって意外と身近な人より、関係ない赤の他人の方が話しやすい時ってあるよなと思いました。

アンドレイが死ぬ前になって、死と向き合い、生の側にいるマリヤやナターシャたちに冷淡になっていくという場面がありました。少し前にNHKスペシャルで放送していた、坂本龍一氏が亡くなる2日前の様子は、創作の意欲にあふれているように見えたのを思い出しました。

それに比べてアンドレイは自分が死と向き合っているのに、生の側へ繋ぎ止めようとするのはやめてくれというような態度だったので、随分違うなと思いました。

ピエールがプラトン・カラターエフからジャガイモをもらってましたが、以前にも戦場でお粥のようなものを兵士から食べさせてもらっていて、よく食べ物ももらう人だなあと思いました。粗末な物でも極限状態で食べるものはありがたいし、美味しいのかもしれないと思いました。

(引用はじめ)

つまり彼も、ドフトーロフ同様、騒いだり音を立てたりはしないけれど、機械のもっとも本質的な部分を成している、めだたない小歯車のひとつだったのである。

(引用おわり)



運動を支えているのは感情の部分では、ロシア魂を持った一兵士や民衆である一方で、ドフトーロフやコノヴニーツインのような冷静な判断できる将校も、目立たないけれど重要な役割を担っているんだなあと思いました。

(おわり)

## 『戦争と平和』 第五巻 P.287～最後まで感想

とうとう第五巻まで来てしまったなという感じです。

私はアンドレイとナターシャは復縁すると思っていたので、少し意外な感じもするし、残念な感じでした。

そんなにうまく行かないかな？ というのもあるし、そんな単純なお話では面白くないのかもしれないし、仕方ないかなとも思いました。

私的には戦争が始まって混乱しているそんな時に再び会った二人はすごく運命的だからハッピーな結末を期待していたので少し残念に思いました。

そんな事を言ったらトルストイ先生に怒られてしまうかもしれないけど。

でも、アンドレイが安らかに最後を迎えられたのは、きっとナターシャの存在が大きかったと思うし、二人の再会は意味があったのだと思うとすごく良かったなと思いました。

色々印象に残る場面がありましたが、私が一番好きなところは

(引用はじめ)

(彼女はあるときアンドレイが、ストッキングを編んでいるばあやほど、うまく病人の看病をできる者はいない、ストッキングを編むことには何か気をしずめるものがある、と彼女に言ってから、ストッキングを編むことを習い覚えた)。(P.402)

(引用おわり)

アンドレイが言った事を実行するナターシャが可愛いと思うし、編み物をしながら看病するのはきっと看病される側も、病人にだけに集中されるよりなにげない気遣いがされる感じが心地よいのかもしれないなと思いました。

相手にとって心地よい存在になれたらいいなと思いました。

何かをやってあげてる感がでてしまうと、なんだかなあと少し醒めてしまうから、私もストッキングを編むような感じができればいいなと、お話とあんまり関係ないけど思いました。

次の第六巻で終わってしまうので、嬉しいような淋しいような感じですが、引き続き読み進めたいと思いました。

(おわり)

## 『戦争と平和 第4部 第1編1章から第2編19章 読書感想文』

### ・大きな問い

「戦争と平和」を読み始めてからずっと頭の中は、「なぜ人間は戦争をおこし、参加するのか」、「なぜ戦争を止めることができないのか」「なぜ気づいたら戦争になっており、自分も加担していたという事態になるのか」、などというような問いでいっぱいです。

### ・問いに対するヒント

そういう頭でいると、第1編4章で、モスクワの住民たちが避難する状況についての「全体状況などには何の関心も払わず、ひたすら目先の個人的な関心事に支配されていた」という描写とトルストイがそうした人々を「この時代のもっとも有益な活動家」だと表しているところは印象に残りました。自己犠牲やら祖国愛やら英雄的行動はろくでもない結果に結びつくと考えます。

### ・ニコライについて

軽佻浮薄な人間に見えるニコライは好きになれませんでした。感想文を書くにあたり読み直したところ、第1編4章に、自己犠牲とは無縁な、絶望も悲観もしない態度が描写されており、これはこれで戦時下においては長所になるのかもしれないと思いました。

### ・ピエールについて

洞察力、観察力が際立ってきたように感じます。第1編10章の尋問の場面はとても印象的でした。裁く側も裁かれる側も「ともに人類の子であり、同胞である」、ピエールを、「思い出、志向、希望、思想もろとも、刑に処し、殺し、命を奪おうとしているのは秩序であり、状況の積み重なり」である、という表現には様々な事例が連想され、これからも何度も立ち戻る予感がしました。処刑を目撃してこの後精神に何か影響がでないのかなと思いました。

### ・プラトンについて

その登場によって小説自体に新たな風が吹いてきたような気がします。これまでのいくつかの場面と同様に「ロシア的なもの」が魅力的に感じられます。

### ・トルストイの観察

第2編1章に、人間の諸現象の原因を突き止めようとする欲求について書かれていますが、この戦争における数々の問いは解答不能であるとのこと、モスクワの大火の原因も特定は難しいようですし、そうなのだろうと理解しますが「無数の種々多様な力が重なった結果」であるとしても、そこで思考を止めてしまわないようにすることが私の大きな課題となっています。

(おわり)

## ショーシャ夫人、カラターエフそれから地酒

(引用はじめ)

「あれはマダム・ショーシャですよ」と女教師はいった。「とてもかまわない方なんですよ。チャーミングな方ですわ」。

(中略)

「ドアを閉めるんなら、ちゃんと閉めてもらいたいものだ！」とハンス・カストルプはいった。

「いつもガランガチャンだからな。だらしのない話だ」 (『魔の山 上 (岩波文庫)』第三章より)

(引用おわり)

トマス・マンの『魔の山』ではヨーロッパの縮図であるサナトリウムでショーシャ夫人がロシア人代表として描かれる。主人公カストルプは彼女のドアを抑えて閉めない奔放さに苛立ちを覚えるが、やがてその東洋的な魅力に惹かれていく。

西洋人は理性という人類共通の行動原理を持つのに対し、東洋人にはそれに囚われない土着の行動様式がある。その新鮮さにカストルプは惹かれたのである。

(引用はじめ)

プラトン・カラターエフはこのうえもなく強く、いい思い出として、あらゆるロシア的な、よい、丸っこいものの化身として、永久にピエールの心にとどまった。

(引用おわり)

第四部第一編ではピエールはカラターエフに土着に根差したロシア人の素朴な美しさ見出す。西洋化されたピエールにとってこの発見は新鮮であり、彼の世界観を再構成するには十分だったのだろう。

さて、ナポレオンのロシア侵攻の背後にあるのはフランス革命という理念の基でのヨーロッパの統一である。すなわち19世紀とは理念、理性による人間の統一が進む一方、それに伴って旧来あった諸国家の個性が失われていった世紀とも言える。

ところで個性に関してだが小林秀雄が岡潔との対談集で以下のように語っている。

(引用はじめ)

小林: 文明国は、どこの国も自分の自慢の酒を持っているのですが、その自慢の酒をこれほど粗末にしている文明国は、日本以外にありませんよ。岡: 日本は個性を重んずることを忘れてしまった。

小林: いい酒がつかれなくなった。

岡: 個性を重んずるということはどういうことか、知らないのですね。

小林: その土地その土地で自然にそういうものができてくるのですから、飲み助はそれをいろいろ飲み分けて楽しんでいるわけでしょう。(『人間の建設(新潮文庫)』岡潔, 小林秀雄著)

(引用おわり)

文豪トルストイは人間の画一化が進む19世紀のロシアの中でロシア人の持つ素朴な美しさを再発見した。

この土地に根差した個性を再発見する行為は、人間がファスト化・画一化していく現在、より重要性を帯びていくと感  
るのである。

(おわり)

## 『戦争と平和 第四部第一・二篇』 感想文

私は以前の感想文で、ピエールの思想的混乱を理由に、フリーメーソンは辞めればいいと書きましたが、すっかり前言撤回しておきます。ピエールがダヴー元帥から尋問を受けて、処刑を免れた時、見つめ合った二人は『この一瞬に無数のことを漠然と感じ尽くし』『兄弟であることを理解した』とされています。〈岩波文庫五巻 P.355〉

私の想像の域を出ませんが、兄弟がフリーメーソンを意味するならば、やってよかった、持ってるね。ピエールの命が助かるために、あのフリーメーソンの膨大な無数の教義を私は読んだのかと思うと、達成感を覚えます。ピエールは、フリーメーソンの亡き恩師バズデーエフの家で、マカールのピストルから敵のランバル大尉を救い、そのマカールも庇って守り、炎の中から幼い子を助け出して、ピエール自身も救われながら捕虜となっています。

プラトンの全人的な魅力に触れて悟りを啓いた虚無僧のように、行軍の中をピエールは歩いています。捕虜たちに馴染みのフランス兵も、ひとたび軍の秩序に戻ると、気心を通わせようとはせず、顔にすずを塗りたくられた死人の、打ち捨てられている地獄絵図が、往く道の不吉さを思わせます。

『わが軍に複雑な作戦はできんことがわからんのかね』〈P.442〉というクトゥーゾフ総司令官のぼやきの通り、作戦命令とはあべこべな流れの中で、なるべくして自然とそうなりながら、カルーガでの糧秣確保とトゥーラの軍事工場防衛のために、側面行進は西南にずれてゆきます。デニーソフやドーロホフのパルチザン・コサック部隊の斥候と突撃が功を奏して、ナポレオン軍がポロフスクに雪崩れ込んだ時点で、クトゥーゾフは敵を完全に押し寄せたと確信し、イコンの前で涙しながら神に感謝します。

ロストフ家は往く先々で懐かしい知り合いから、なにくれ親切にしてもらえて、トロイツァ大修道院でも院長が訪ねてきて祝福を受けます。幾度も国難を救った聖人の伝説が語り継がれるトロイツァで、アンドレイは、かなりよくなり、ナターシャが『神様のおかげ』だと信心を見せる横で、共に涙するソーニャの心の内には、ニコライを MARIA から取り戻したい算段があります。

ソーニャは変わろうとしないことに対してナターシャから『なにかが欠けている』と表現され、またロストフ伯爵夫人には『策を弄する女』と揶揄されてきました。〈三巻 P.270, 307〉二十二歳を迎えており、鏡占いの嘘を美化する思い出補正や、ニコライに宛てた裏腹な手紙のように、どうしてソーニャは不調和を以って描かれるのか。なぜ温かさを感じさせないのか。

(引用はじめ)

『ソーニャはニコライに対する自分の穏やかな、清い愛からふいに、掟よりも、善よりも、宗教よりも上に立つ情熱的な気持ちが生じはじめたのを感じた。』

『会ったときに彼を自由にするためではなく、逆に、永久に自分と彼を結び付けてしまうためだった。』〈P.338〉

(引用おわり)

本作においては、待つことと耐えること、なるべくして自然とそうなったという巡りあわせの後に、神あるいは意志を直観する場面が描かれていますが、それに対して、心を隠して生きる隷従と、策を弄して支配しようとする自意識との混合体は、およそ『山上の垂訓』のような掟よりも、自己の情熱が優位になると、自分あるいは自分以外の誰かを、消してしまおうとしかねない。寄る辺なき心の有りようを救おうとしているトルストイが、不調和に対して筆を緩めることはないのだろうと私は思います。『常に愛のために自分を犠牲にすることは、だれも愛していないことを意味していた。』〈P.401〉

アンドレイの臨終は、読書会の解説その 91 と、同じく『臨終の人への気休め』を併せて読むことで、生に執着している者たちに敵意を込めた冷笑で応えるアンドレイの死が、真に迫ります。

世俗の全てからの疎外や、意志への回帰を直観しているアンドレイと、今まさに世俗の喜びに花を咲かせて生きんとするマリアとの、ちぐはぐな心の遣り取りが、克明なリアリズムで描かれているのに対して、あからさまなコントラストで、エレンはナレ死します。ゆえにワシーリー兄妹の内面は一卷から、ほとんど記述されず、読者の意識に不道徳を挿入しない点で、詩編が世界の未来に及ぼす力をトルストイが信じていることに私は感銘します。

(おわり)

## 緑のマトヴェーヴナおばさん

というおばさんが毎朝、通学路に立って安全に誘導してくれたおかげで僕たちは事故なく小学校に通うことができたんだなあ。

### ▼あらすじ(第4部第1編第1章～第2編第19章):

とりあえずエレンが死んでニコライ花嫁争奪戦はソーニャが辞退したからマリヤが勝ってアンドレイが死んだ一方で戦争はずっと続いてクトゥーゾフの「攻撃したらアカン」という指示に各将軍は従わずグズグズだったけどフランス軍も弱体化してお互いグズグズだったのでフランス軍はとりあえずモスクワからスモレンスクに後退して、あと、ピエールはなんか大笑いしていた……的な話。

### ▼読書感想文 ～プラトン・カラターエフの存在意義～:

第1編第12章～第13章にかけて、捕虜となったピエールが同じ境遇である「プラトン・カラターエフ」なる男と出会うが、作品全編を通してこの人物だけは異端である。これは作品の欠陥だろうか、いや、超人トルストイがそんなヘマをするはずがない。カラターエフは作者の知的操作の賜物だろう。というわけで今回は、カラターエフが異端であるとした理由と共に、彼がもたらす作中効果を説明する。

### ◎カラターエフの人物的特徴(第12章～第13章より要約):

- ①外見については姿全体がまるい。頭も背も腕もまるい。
- ②上記と同様に <<気持ちのいい微笑と、大きな茶色のやさしい目も、まどかだった>> とある。
- ③年齢は50歳過ぎらしいが自身の正確な年齢を知らない。また、無邪気で若々しい表情をしている。
- ④よどみの無い声には説得力があり、発言が矛盾することもあるが彼の話は <<美德の性格>> を帯びている。
- ⑤あらゆる事柄に執着を持っていない様である。
- ⑥祈りの文句のほかは、何もそらで覚えておらず、自身の発言を思い出すことができない。
- ⑦彼による「個々」の言葉や行為は彼自身意味も分からず、また、意味を持たない。

### ◎仮象の産物としてのカラターエフ:

上記の通り、カラターエフは人間でありながら様子がおかしい(個性的ではなく異質である)。とはいえ、③⑤⑥に関しては捕虜生活による精神異常にも思えるが、ただ、彼の発言の内容自体は、私が読む限り「気の良いおっさん」という印象なので彼の頭がイカれてしまった訳でもなさそうである。そして、肝心である⑦に注目すると、カラターエフによる個々の言葉と行為は意味を持たないが(全体の一つの「単位」としてだけ意味を持つに過ぎない)、そのため彼の言葉と行為は <<たえず同じように、必然的に、直接的に、その全体から流れ出る>> のだという。左記の引用は一見して意味不明だが、これはつまり、「カラターエフはそれ自体『個』でありながら『全体』の意志を持つもの」としてピエールの前に現れたのである。で、当のピエールにしてみても後年、カラターエフについて <<尊い思い出、善良なまどかなすべてのロシア的なものの化身>> と述懐しており、左記の「化身」という言葉からして、現実界に在るはずのカラターエフに矛盾を覚えていた様である。ではカラターエフは具体的に何者なのか?という疑問が湧いてくるが私の能力では直ぐに答えを出すことができない。が、諦めるのはまだ早い。ここで、前述した「化身」というピエールの考えを推し進めるとカラターエフは「超越論的仮象(※1)」と言い換えた方が適切ではないだろうか。要は、カラターエフなるものの実体は我々の能力では直感することができず、そのため、仮象(仮の姿)として残り続けてしまい、ついに誤謬や矛盾を引き起こしてしまうのである



(結果、③～⑦が生じる)。よって、人間である私にも仮象が適用されるためカラターエフを異端(＝リアリティを著しく欠くもの)であるとした。

※1…あるいは先験的仮象ともいう。超越論的仮象は認識論において多く用いられるが、本感想文では「人間理性にとって不可避免的な錯覚」とする。超越論的≠超越的。

◎カラターエフがもたらす作中効果:

といったことを考えながら、トルストイはカラターエフの外見について、上記①の通り「まるい」と繰り返しており、この表記こそが第4部第3編のとある場面に直結するのだが、そろそろ感想文の文字数オーバーなので「まるい」が暗示するもの、そして作中効果(著者の意図)については次回の感想文で引き続き説明する。

以上

(おわり)

## 大地の潜熱としてのジャガイモ

NHK BSでYBC山形放送の制作した『三つめの庄内～余計者たちの夢の国～』というドキュメンタリーを見た。戦後帰国(8割はソ連侵攻ののち満州で死去)した庄内出身の満州開拓団の人たちが、青森の六ヶ所村などに再度開拓団として移住したという話だった。

後期高齢者となった移住者の女性が語っていたことが印象的だった。開拓して何年かしてもご飯にジャガイモが入っていたが、ジャガイモが入っていて、よかったのだという。それまでは山菜などで食いつなぎ、ひもじかった、と。だいたいこんなようなことを言っていた。

(引用はじめ)

「ジャガイモがなんより大事じゃけえ」彼はくり返した。「食ってみんさい、ほれこんなふうに」  
ピエールはこれ以上美味いごちそうを、いまだかつて食べたことがないように感じた。

(五巻 P.369 第四部第一篇 12)

(引用おわり)

寒冷地でも根菜は栽培できる。霜が降りると葉物野菜や果物はうまく生育しないそうだ。満州を開拓した人々はシベリアのロシア人ほど、農業が上手くなかったそうだ。岩波文庫版のコラムに書いてあった気がする。

プラトン・カラターエフは何者か？ 私は彼をロシアの自然と一体化した人物だと思う。自然の大きな循環過程に一体化している人物である。シヴィライゼーション(文明化)されていない未開の部族のようなものだ。

(引用はじめ)

実際、族長たちは、地上における個人の不死も、魂は永遠であるという確信も別に必要とせず、死は親しみやすい夜のように彼らのもとに訪れ、静かな永遠の休息は「歳月に満ちたよき老年に」訪れるのである。

(ハンナ・アレント『人間の条件』ちくま学芸文庫 P.164)

(引用おわり)

トルストイは、アンドレイのドイツ観念哲学を地で行くようなシヴィライズドな死生観に、プラトン・カラターエフの生命観を対置している。それは上記の族長のように自らの生と死を自然の巨大な循環過程の中に収めて理解する考えである。アンドレイは意志を持ち出して、現象外側での存在可能性としての死を発見したが、プラトンには現世の自然過程への強い信頼がある。彼の言葉は自然の循環過程と一体化しているため、片言隻句を切り離すと意味をなさなくなるのである。プラトンの人生は、皇国史観の礎となる高天原に対置された柳田國男の山の人生みたいなものだ。

モスクワの壊滅と共に 文明化され国家化されていたアンドレイという人物は亡くなったが、国家の存亡と別に民衆の生活があり、地熱に育まれるジャガイモのように自然の中にひそやかに息づくプラトン・カラターエフの生命が、モスクワ陥落後のピエールの精神的な拠り所になっていったのだ。

(おわり)